

Title	「人形振り」論考
Author(s)	澤井, 万七美
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.11501/3161834">https://doi.org/10.11501/3161834</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	澤井方七美
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第14892号
学位授与年月日	平成11年7月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科 芸術学専攻
学位論文名	「人形振り」論考
論文審査委員	(主査) 教授 天野 文雄 (副査) 教授 柏木 隆雄 助教授 永田 靖

## 論文内容の要旨

本論文は、歌舞伎独特の演出として知られる「人形振り」について、それが創始された近世後期から現代までにわたってその実態を究明し、あわせて「人形振り」にたいする役者の取り組み方や観客の評価の変遷をたどった「人形振り」についての総合的研究で、分量は400字詰原稿用紙に換算して510枚の論考である。

第1節「江戸時代の人形振り」では、「人形振り」という演出の定着について大きな功績があった三世中村歌右衛門と「人形振り」とのかかわりについて検討し、三世歌右衛門によって多くの演目で「人形振り」の演出が試みられたこと、その影響をうけて、ライバルだった三世坂東三津五郎も「人形振り」を採用するようになったこと、後継者たる四世歌右衛門や三世中村芝翫らが「人形振り」を継承したことなどを論じて、「人形振り」における三世歌右衛門の影響の大きさを指摘する。

第2節「近代歌舞伎の役者と人形」では、近代歌舞伎の基礎を築いた「劇聖」九世市川団十郎と「人形振り」とのかかわりをめぐって、明治～昭和初期における「人形振り」にたいする役者の姿勢の変化を論じている。九世団十郎は維新後にわが国に入ってきた西洋演劇の影響などをうけた役者で大の「人形振り」嫌いであったこと、その九世団十郎の影響で、明治末期～昭和初期の歌舞伎界のスター役者だった五世中村歌右衛門と六世尾上菊五郎も「人形振り」については九世団十郎と同じ姿勢をとったこと、しかし、その一方で、観客の側においては「人形振り」は人気があり、興行側もそうした動向を無視できなかったこと、などが指摘される。また、この節では、幕末から明治末期頃までのこととして、歌舞伎役者が人形遣いから演技全体にわたる指導をうける慣習が存在していたことを指摘して、人形浄瑠璃と歌舞伎との間にあった緊密な交流についても言及している。

第3節「近代の人形遣い」では、明治期の東京における人形遣いの第一人者であった吉田国五郎(三世)を中心に、明治～大正期の「人形芸」の実態について検討している。そこでは、明治中期にわきおこった「人形無用論」や、東京における人形芸の衰微などが紹介され、さらに、昭和前期の短い期間ながら、東京でめざましい活動を展開した素人人形浄瑠璃の南北座の事績が紹介されている。また、この節では、結城孫三郎座の糸操りによる人形芸にも注目し、同座が売り物とした「歌舞伎操り」が、歌舞伎の「人形振り」を忠実に取り入れようとしたものであったことを指摘

して、「人形振り」の複雑な展開の一事例としている。

第4節「近代から現代へ」では、大正期から現在までの東京や上方における「人形振り」の実態が検討されている。そこでは、三世中村雀右衛門を例に、大正～昭和初期には「人形振り」は古風な演技で、それは上方役者の芸風であるという認識が定着していたこと、その一方、七世坂東三津五郎などのような東京の役者で「人形振り」によって評価されたような例もあったこと、などを指摘したうえで、戦前までは「人形振り」を邪道とする空気が強かったのが、昭和30年代から、「人形振り」は登場人物の感情の頂点を表現するのにふさわしい演技様式であるという見方が主流になった、とする。また、このような新しい「人形振り」観の出現にもかかわらず、「人形振り」を得意としていた上方歌舞伎の衰退によって、現在では、「人形振り」の上演は減少傾向にあることをも指摘している。

## 論文審査の結果の要旨

本論文で検討の対象とされている「人形振り」とは、歌舞伎のある一場面について、役者の身体を人形にみたてた歌舞伎独特の演技様式である。「人形振り」の場面になると、役者のセリフは浄瑠璃にゆだねられて演技はパントマイム式になり、背後には黒衣もしくは袴姿の人形遣いの役をする役者がついて、その場面全体が人形浄瑠璃を模した趣向をとることになる。このように、生身の身体を持つ役者がわざわざ人形風の演技をするものには、バレエの『 Coppélia 』や『くるみ割り人形』などがあるが、それらでは人形風に演じられる役は劇中でも人形として登場しているのであって、人間として登場している人物を人形風に演じる歌舞伎の「人形振り」は、世界の演劇においてもまことに特異な演技様式と言える。本論文は、このような歌舞伎の「人形振り」について、近世後期から現代にまでおよぶその歴史を、丹念な資料調査によって時代ごとにたどったもので、「人形振り」についての最初の総合的な研究と評価できるものであるが、その論はたんに「人形振り」の実態の究明だけにとどまるものではなく、そこには、歌舞伎と人形浄瑠璃との相互交流の実態、江戸・東京と上方の演劇観のちがい、あるいは歌舞伎や人形浄瑠璃の本質など、歌舞伎や人形浄瑠璃研究上、きわめて重要かつ興味深い問題についての論が展開されている。本論文の価値は、このような論の広がりにも端的に示されていると言えるが、「人形振り」という視点から論じられた如上の問題は、その視点の斬新さとともに、おおむね説得的であり、「人形振り」の実態の解明とともに、本論文がこの分野の研究の進展に貢献することは疑いのないところであろう。

もっとも、歌舞伎と人形浄瑠璃との関係についてはこれまでも数多くの研究の蓄積があり、そのなかには歌舞伎における人形芸の撰取を論じた研究もあるが、本論文においては、そうした論への言及・批判がほとんどない。本論文において展開されている論は当然そうした研究とかかわるはずであり、その点への配慮がなされていたならば、本論文の論はより説得性を増したことになると思われる。しかしながら、従来は研究がまったくなかった近代の「人形振り」の実態を解明したことは本論文の大きな価値であり、そのなかでも、その存在そのものが研究者にほとんど知られていなかった南北座の活動を発掘したことと、糸操りの結城孫三郎座の活動の整理とその「歌舞伎操り」の特異性についての指摘などは、とりわけ特記されるべき指摘と言えよう。

本研究科は本論文を以上のように評価し、本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。